

ほかの職員を研究室に召集した。ピストルを指しながら、いましがたこの部屋で起きたことを説明し、ピストルに触れる者がいたら即刻憲兵に報告すると申し渡した。ピストルはその年(1945年)の9月、私がアーケイ大佐に手渡すまで教授の机の上に置かれたままであった。机の隅におしやられ、紙のおおいをかぶってはいたが。

郡場教授はピストルのことには一言も触れなかった。昭南島をおおう不吉な雲は次第に重くなってきたが、私たちの彼に対する信頼はけっして揺らぐことはなかつた。敗戦という土壇場に立ち合わずとも、年齢からいっても地位からいってもいつでも職を退き、捕虜や抑留者になる運命から逃げることはできたはずである。だが、彼の正義感と仕事への強い義務感は、彼を最後まで植物園に踏み止まらせた。安易な道より、いさぎよく抑留者になる道を選んだのである。”
おわりに

今の若い世代の会員のほとんどのかたは郡場寛先生の経歴や業績を知らないであろう。先生の師で、日本で初の植物生理学講座の教授となった東京大学三好学博士についても同様でないかと私は想像する。戦争という異常な状況にあつて、軍の支配のもと、なおも研究を続け、敵国の研究者を同僚として扱い憲兵から守る、ということは普通では出来ないことであろう。私も戦時中に中学生で、軍隊や憲兵に抵抗することがいかに困難であつたかを想像することができる。コーナー博士の本を読み、改めて郡場先生の立派さを認識し、さらに今回シンガポール植物園を訪れた機会に現在でも園の人たちが先生を尊敬と親愛の情をもって覚えており、写真を掲げて敬意を払っていることを目のあたりに見る機会をもつたことは、大変に嬉しいことであつた。コーナー博士の『思い出の昭南博物館』を一読し、シンガポールを訪れる機会があれば、ぜひ植物園を見学されるよう会員の皆さんにお勧めしたい。同市の清潔な町並みと美しい緑も気持ち良く、私たちの環境改善にも参考になるように思う。(日本植物生理学会通信 58:12-15、1993)

「坂村 徹先生の植物生理学」

先年来日した西ドイツ、チュービンゲン大学のビュンニング (Erwin Bünning) 教授の著書 “Wilhelm Pfeffer” (1975) の 93-95 頁に『Die Leistungen dieser Mitarbeiter dargestellt, hiesse, ein Stück Geschichte der Pflanzenphysiologie von Pfeffer bis zur Gegenwart schreiben. Begnügen wir uns mit einem Beispiel: Keita Shibata aus Tokio...』ではじまる部分がある。ここでビュンニング教授は柴田桂太先生がライプチヒに留学の目的で北大農学部(当時は東北帝大農科大学)から東京へ帰り、ライプチヒそしてフランクフルトで学んで帰国した後、Acta Phytochimica を創刊し、日本における植物生理学、生理化学にペファーの学風を伝えたことを書いている。ペファーは世界各国から集まった合計 265 名の門下生を教育したそうで、なかでもアメリカから多くの学生がライプチヒに集まった。ペファーのもとに初めて学んだ日本の植物学者は三好学先生で、三好先生はわが国の植物生理の創始者といえるであろう。柴田先生について大野直枝先生もペファーのもとに学び、さらに郡場寛先生もライプチヒに学ぼうとしていた。出発直前に第一次大戦勃発のため欧州航路が停止となったため、郡場先生がアメリカ遊学ののち、大戦終了後大西洋を渡って欧州に到着し、ライプチヒの土をふんだとき

はペファーが1920年1月31日死去したあとであった。いずれにしろ、わが国の東京帝国大学にはじまる植物生理学の伝統は、ペファーの流れを汲むものが主流となっていたことは周知のとおりである。

ペファー—三好学—柴田桂太の流れに入っていない植物生理学の一つは東北帝大に招かれたウィーン大学のハンス・モーリッシュによるものであった。しかし、モーリッシュの去ったあと、三好学門下の山口弥輔（その前に同じ三好学門下の日比野信一が台北帝大に移っている）が植物生理学教授となった。このため、モーリッシュの伝統は現在の日本にはほとんど伝えられていない。

もう一つの、そして現在も続いている流れは坂村徹先生の植物生理学である。私が非常に興味をおぼえるのは、坂村植物生理学が柴田、大野、郡場—ペファーと関連して発生した、という歴史的事実である。前述のように、北大農学部植物生理学教授であった柴田桂太先生が札幌を去り、つぎに迎えられた大野先生はライプチヒから帰任後程なく死去し、大野先生の後任に迎えられた郡場先生も京都帝大理学部植物学科創設委員としてライプチヒに学ぶべく札幌を去った。こうして、東京帝大三好学門下から迎えられた3人の教授はいずれもペファーのもとに学ぶべく北大を辞任あるいは帰任後死去、という事態になったのは単なる偶然とはいえ、あまりにも奇妙に思える。結果として、細胞学から転じた坂村徹先生の、とくに植物細胞生理学という性格の強い植物生理学が生まれたのはわが国の学界にとって誠に幸運であったといえよう。

周知のように、三好、柴田の伝統を汲む学問は現在もわが国の学界において重要な地位を占め、顕著な業績をあげている。しかし、北大を中心とし、各地に門下の方々が研究を続け、坂村徹先生の伝統が生きている。さらに、坂村先生の直接の御指導を受けないで、間接的教えを受けたわが国の植物生理学徒は多い。それは、坂村先生の著わしたわが国初の本格的著作といえる「植物生理学」（昭和18年）によっている。

私事にわたるが、私が松山高等学校理科の生徒であった頃（昭和22年—25年）、第一学年の植物学を小野記彦先生（その後名古屋大、東京都立大、帝京大）に習った。小野先生が名古屋大学へ転出されたあと、東北大学から宮本義男先生（愛媛大、聖カタリナ大）が赴任され、植物学の講義をされた。私が坂村徹先生の「植物生理学」を知ったのは、この宮本先生の講義のときであった。宮本先生の講義内容は主として植物生理学で、しかも細胞生理、成長、運動が中心であった。宮本先生の植物学講義は私にとって非常に面白く、とうとう、当時私の志望であった物理学から植物生理学へ興味を中心が移ってしまった。宮本先生の講義のとき、私が質問すると、宮本先生はそのたびに種本とおぼしき大冊の本を開き、「ここにはこう書いてあります」と頁を開いて示された。今でも印象に残るのは、幼葉鞘や根の屈電性（galvanotropism）に関する宮本先生の講義である。先生は、根はマイナス極のほうへ、幼葉鞘はプラス極のほうへ屈曲している写真の頁を示され、“今にこのような現象もアウキシンで説明できるようになるでしょう”と話されたのを思い出す。先生の講義にはそれまでも、アベナ（Avena）がしばしば出現し、屈性や生長のお話しはほとんどアベナと関係していた。後年、医学や工学に進んだ私の同級生たちでも、宮本先生、というとアベナが連想される、という人が多い。電気屈性に関する宮本先生の講義のとき、私がおたずねしたところ、“これは北大の坂村徹先

生の名著です”と教えて下さった。のちに大学を出て数年後、私は欧州遊学中、ロンドンのベッドフォードカレッジのJ. オーダス (J. L. Audus) 教授を訪ねる機会をもった。オーダス教授は屈性とホルモンの研究者で、私に巨大な静電気の装置を示し、もし自分が幸運なら、この装置で電気屈性がオーキシンの不等分布によって説明できるか否かがはっきりできるかも知れない、と語った。話が外れたが、私が宮本先生の授業を受けた高等学校 2-3 年生のとき、先生に私は坂村先生の本を買いたい、と申ししたところ、宮本先生は“近いうちに改訂版が出るという噂だから、そのほうを買ったらどうですか”と仰言った。植物学科などに入ったら将来、飯が食えないからおよしなさい、という宮本先生の反対を押し切って京都大学理学部へ入って間もなく、坂村先生の植物生理学上巻が出た。この昭和 25 年、百万遍の書店で新発売の上巻を見つけ、アルバイトで溜めたお金でこれを買求めたときには、とても嬉しく、これで漸く植物学学生になった、という気分であったことを今でも思い出す。しかし、私がとくに待ちこがれていたのは生長、運動を扱った下巻であった。下巻が出たとき、私は 2 回生になって間もない頃で、そろそろ卒業研究のテーマも考えようとしており、この下巻をむさぼり読んだ。この頃、同じ坂村先生の「植物細胞浸透生理」もあわせて読み、私の師である芦田譲治先生に細胞生理学的な方法でオーキシンの作用を研究したい、と申し上げた。卒業後、植物学雑誌に掲載された私の独文処女論文の別刷を坂村先生にお送りしたところ、思いがけず御返書を頂き、次に改訂を出すときには君の仕事を引用したい、と書いてあったので、大変感激し、また励みになった。ずっと後年、私が「植物生理学」を出したとき、広島に御在住だった先生にこの小冊を一部お送りしたとき、奥様からお手紙を頂き、先生が御病気であることを知った。

私事を長々と述べたが、直接に坂村徹先生の教えを受けなかった私のような者でも、右のべたように先生の「植物生理学」によって研究者としての第一歩を踏みだしたわけである。このような例は私一人だけではないと思う。昭和 18 年以後、日本語で書かれた総合的大冊「植物生理学」は他に例がないわけで、植物生理学を学んだわが国の研究者で、坂村先生のこの大著をひもどいたことのない人は皆無であろう。はじめにのべたように、わが国の植物生理学の主な流れはペファー—三好學—柴田桂太の伝統を受け継いでいるが、坂村徹先生の植物生理学は、その不朽の名著によってわが国の研究者のほとんどすべての人々に有形無形の影響を与えているとあってよいであろう。(鳥山英雄編「坂村徹先生の追想」20-25 頁、開成出版株式会社、1982)

「芦田譲治先生の御逝去を悼む」

本学会の初代会長ならびに名誉会員であられた芦田譲治先生は、本年 10 月 8 日午前 10 時 57 分、御病気のため 76 歳をもって御逝去になりました。まことに痛恨のきわみであります。

芦田先生は明治 38 年 (1905) 4 月のお生まれで、第三高等学校をへて昭和 3 年 (1928) に京都帝国大学理学部植物学科を卒業され、そのまま教室に残られました。ムジナモの捕虫葉の運動に関するきわめてユニークな御研究により昭和 14 年、理学博士の学位をうけられました。小動物の刺激をムジナモの感覚毛が受けると、<その刺激が捕虫葉基部の運動部位に達し、これによってその内側の細胞が膨圧を失い、外側の細胞の吸水力によって葉が速かに閉じる。や